

古典主義建築としてみる日本銀行本店本館

外観にみられるドリス式オーダーとコリント式オーダーのディテールについて

菅野裕子

日本銀行本店本館（以下、「日銀本店」とする）は建築家辰野金吾の代表作だが、中央停車場（東京駅）や中之島公会堂といった彼の他の作品と比べると、近づきがたく感じられることもあるかもしれない。この建築は、本格的な古典主義様式によるもので、古代ギリシアを起源とするこの様式は、一般的には親しみやすいというより格式張った印象を与える。ただ、この様式には厳密な規則があるが、同時に、自由な創意を加えることもできるので、そこからそれぞれの建築の個性や味わいが生まれてくるものだ。とすれば、この建築も、一つの古典主義様式のものとしてみることで、建築家の創意を読むことができるのではないだろうか。本稿では、このような視点に立ち、日銀本店の建築について、特に外観のドリス式とコリント式オーダーのディテールに着目して考察を試みたい。

■ 日銀本店の全体の構成

考察に先立ち、日銀本店建物の構成や立面のデザインについて、本稿で必要になる範囲で確認しておきたい。

全体としては、ほぼ正方形の平面の形をしている。主屋は北側に建つ矩形の建物で、それに対し東西の両側面に翼部がとりつき、両翼部が南側に張り出すことでコの字型が形成され、さらにそのコの字型の建物に囲まれた空間を閉じるように、南側に障壁^{*1}としての壁面が立てられる^{*2}。

立面構成を見ると、西・東・北側は2層構成で、下層の1階部分を滑面石積みのルスティカ^{*3}とし、上層の2・3階は古典主義建築オーダーの円柱を持つ。この2層構成は、イタリアのヴィラやフランスの宮殿建築で多くのバリエーションが見られるものだが、歴史を遡ると、ブラマンテ設計によるカプリニ邸（1510年頃）というローマの邸宅にみられたものだ。この構成は、辰野が参照したベルギー国立銀行との主要な共通性でもある^{*4}。一方、南側の障壁だけは、2層ではなく1層で、ルスティカに付柱が組み合わされている。

■ コリント式柱頭

この日銀本店の建築では上層階の円柱はコリント式だが、その柱頭は通常のものとは異なるユニークな造形を持っている（p.14、上部写真）。ここでは、その形を観察する中で、辰野の意図を読みとってみたい。

一般的には、コリント柱頭^{*5}の植物装飾のモチーフはアカンサスの葉とされる^{*6}。ところが、日銀本店のコリント柱頭は、葉の表面は平らで、輪郭もひとつながりの滑らかな曲線を描いていて、一見してアカンサスには見えない。この特徴はこの柱頭デザインで最も目立つものだが、これは何をモチーフにしているのだろうか。

これに類似した葉の表現を探すと、たとえば、有名なところではローマのコロッセオやフィレンツェのパラッツォ・ルチェッライにも平らな葉は見られ^{*7}、ルネサンスの建築書にもそれに似たような姿はしばしば描かれていた^{*8}。辰野は1882（明治15）年から翌年にかけてフィレンツェとローマを訪れていたの、これらを実際に目にしていた可能性はある^{*9}。とはいえ、たとえ見かけ上の形が類似していても、その表現意図までが同じとは限らない。



図1 日銀本店のコリント柱頭の葉のディテール。中央脈が立体的にかたどられ、水平の葉脈が彫られている。葉の先端はあまり薄くならず厚みを持つ。

たとえば、パラッツォ・ルチェッライに関して言えば、そもそもそれはコロッセオを範としていたものだったし、そのことを除いても、平らな葉は平面的な付柱にふさわしいとも考えられる。また、ルネサンスの建築書にみられる、葉のディテールが描かれぬ図は、ルネサンス当時の印刷技術の都合上の理由で、図を簡略化する目的も大きかっただろう^{*10}。

それに対して、この日銀本店ではどのような意図があったのだろうか。実は、道路から見上げると表面はほとんど平らに見えるが、実際には表面には細かい装飾があるので、まったくの平らに作りたかったというわけでもないようだ^{*11}（図1）。従って、たとえば、施工上の難しさ等の理由によるやむをえずの選択だった可能性はあるかもしれない^{*12}。

ところで、この柱頭でもう一つ特徴的なのは、渦巻きの縁が太く、植物というより、幾何学的な工業品を連想させる曲線を描いていることだ。さらに、葉と渦巻きの大きさの比率をみると、渦巻きは一般的なものよりやや大きめに作られている^{*13}。このような例は、近代以降のコリント柱頭にしばしば見られるものだが、それによって、写実的な植物装飾に対して幾何学的な形の比率が大きくなるので、それは近代らしい気分にも合致していただろう。

こうしてみると、このコリント柱頭の葉の簡素な表現は、渦巻きに見られる幾何学とも相性が良く、同時に、それはこの円柱の溝彫りのない柱身や、装飾のないペディメントやフリーズともよく調和している。さらに、これらで構成されたコリント式の円柱全体は、この建築全体における端正な壁面ともよく釣りあっている。そう考えると、最初に着目した特徴的な葉の表現は、すべての条件を考慮した計画の中で、全体を破綻なくまとめようと腐心した末の解決策だったようにもみえてくる。

コリントの柱頭は、ドリスやイオニアと比べて造形の自由度が高いこともあって、歴史の中で多様なデザインが生み出され、そこからは時代の好みや建築家の個性が読み取れることが多い^{*14}。また、柱頭は、大きさとしては建物全体のほんの一部分だが、一つの独立した形ではなく、建築の全体に合わせてデザインしうるものだ。もちろん、実際には、標準的な形そのままで作られたコリント柱頭も多いが、日銀本店の柱頭は、辰野によってこの建築のためにデザインされたもので、個性的な造形を持つ^{*15}。だから、ここには建築家辰野の趣向や意欲がこめられているはずで、さらに言えば、彼のその手腕のほどさえも一目のうちに推しはかれる造形として受け止められるものだ。その形は、簡素で幾何学的であると同時に、写実的な表現からは人間の手の仕事かみえてくる。抽象（＝幾何学）と具象（＝葉）を表現のうちにあわせ持つこのコリントの柱頭は、歴史や伝統の重みと、そこから前進しようとする力とのせめぎ合いが形となっている。

■ 南側障壁 トリグリフを持つドリス式オーダー

南側の障壁の前に立ち正面玄関の方を向くと、目の前の壁と、その壁の奥の回廊には、どちらも同じドリス式オーダーがある。ただ、ディテールを見ると両者には違いがあり、前者にはトリグリフ^{*16}があるが、後者にはない。以下、その意味について考えてみたい。

この南側の障壁は、ルスティカにドリス式の付柱が組み合わされた城



図2 障壁のトリグリフ。グッタエに相当する部分がひとつながりの帯のように作られ、また、左右の側面は垂直ではなく、わずかに下へ広がっている。

塞のような姿で、セルリオの建築書のトスカナ式オーダーの挿図を思い起こさせる*17。ただ、セルリオの図と違うのは、日銀本館の障壁の付柱はドリスであり、さらに柱台を備えていることで、柱台があるため柱は壁面の高さに比してほっそりとしている。この構成は実は、内側に入ったとき、中庭回廊の円柱と一体となり、すぐれた効果をもせることになるものだ。ここではまず、柱上部にあるトリグリフとその下部のやや特異な表現に着目したい(図2)。

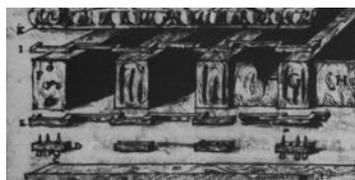


図3 16世紀に描かれたドリス式オーダーの本造軒桁の図(部分)。梁材を下から支える木柱が描かれている。

トリグリフとは、木造の梁端部の名残と考えられている装飾だが(図3)、日銀本店のものは彫りが浅めで、特にその下のグッタエ*18を見ると、三角形の形がなくなり、すべてが一体化したひとつらなりの帯になるという、かなりめずらしい姿となっている*19。これによく似た表現は、『辰野金吾滞欧野帳』第3巻のヴェルサイユの庭園の門のスケッチにもみられるが(図4)、実際のこの建築



図4-2

図4-1 『滞欧野帳』第3巻の、ヴェルサイユの庭園の北側の門のスケッチ。グッタエが帯のように描かれている。

のグッタエは標準的な形をしているので、スケッチでの表現は単にディテールを省略したものだった。一方、この帯のような形が現実に作られてしまうと、本来ここには6つの小さな三角形が並んでいるはずなので、一瞬、目がかすんだか錯覚させるような、独特の効果が生み出される。

このように抽象化されたディテールで、もう一つ思い起こされるのは、17世紀イタリアのスカモッツィの建築書だ。トリグリフはドリス式にのみみられるものだが、スカモッツィはトスカナ式においても、同じプロポーションを持つ矩形の輪郭を描いていた*20(図5)。それは、いわば原始的に一段階後退させたトリグリフとみなせるが、日銀本店のものは浅い溝を持つので、むしろそれが風化したようにも見える。

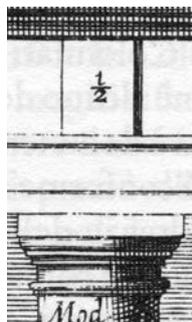


図5 スカモッツィのトスカナ式オーダーの図(部分)。トリグリフの位置に矩形の輪郭が描かれている。

■ 中庭回廊 トリグリフを欠いたドリス式オーダー

障壁の入口を抜けると、半中庭のような空間が広がり、ドームとペディメントを持つ正面玄関の目の前になる。この正面玄関では、上層にコリント式円柱、下層にドリス式円柱が用いられイオニアはないが、2階の窓上部がイオニアのフリーズを連想させるふくらみを備えていることは興味深い*21。下層部の東西北面に連なる回廊には、ドリス式円柱が並び正統的な雰囲気漂わせるが、フリーズにはトリグリフがないためすっきりと感じられる。もちろんドリス式オーダーでトリグリフを省略すること自体はめずらしくないし、上層のコリントでもフリーズは装飾を持たないので、その点では調和がよくとれているといえよう。ただ、南側の障壁においては、円柱より簡素でいいはずの付柱にトリグリフが備わり、なによりそれが印象深い姿を見せていた。そのせいで、中庭

のフリーズの空白では、本来あるはずのものが欠如しているという印象が、その分だけ強まることになる。その空白はまぶしいほど白く、まるで、木造だった太古の記憶がきれいさっぱりと消去されているようだ。

■ 外部と中庭を隔てながら結びつける障壁

ところで、外からは、コリントの大オーダーやその上のドームは見えるが、中庭の様子は、南側に立ちあがる障壁のためわからない。そのため、中に入ると、そこに美しい列柱の回廊が広がっていることに驚かされることになる。このように、中庭は、この障壁のおかげで、外部の都市空間に対し内向的な空間として守られている。つまり、この障壁は、その別世界へと抜けるフィルターとなっているのである。しかし同時に、この障壁は、二つの異なる空間を巧みに結びつける役割を果たしている。特に、その方法が、まさに古典主義の建築言語によるものであることに注目しておきたい。つまり、4面をとりまくルスティカの壁面で、唯一、この障壁だけにドリスの付柱があったが、それは、その奥に広がる中庭のドリス式の円柱を暗示していた。一方、風化したようなトリグリフのレリーフは、それがこれから消えゆくことの予兆のようだ。二つの空間を隔て、かつ、結びつける障壁において、このトリグリフは両者を関係づけ、その意味は外から内へ入っていく中で生まれる。細部が消えたおぼろげな姿は、記憶の中の残像のように目に映るが、それは大きな歴史が消えゆくことを暗示させる。こうして障壁を通り抜けたときには、再び目に入る上層のペディメントやコリント式オーダーでも、装飾を欠いた空白が一段鮮やかに見えてくるかもしれない。

■ おわりに

本稿では、日銀本店の建築について、古典主義様式のディテールに着目して考察を試みた。実際には、特徴的に見えるこれらの表現は、当時の技術的な事情によるものだったかもしれない。とはいえ、そのとき同時に、その条件をも表現としてしまおうという企みがなかったということにはならないだろう。また、古典主義建築のデザインは、それが生まれたヨーロッパの地でも、常に過去の作例が参照され見直されながら更新されつづけてきた。そのこと自体は日本近代における古典主義建築でも変わらないはずだ。どの地であっても、一つ一つの建築は、その建設での個別の要請や固有の敷地条件をくみとられて作られてきたのであり、その中で、古典主義建築のデザインは新たな創意を加えられながら積み重ねられてきた。その意味を読みとることの可能性はまだ残されているのではないだろうか。

註

- *1 この南側の壁面は、これまで日銀本店の建築に関する主要な文献において「障壁」と呼ばれ(藤森照信『日本の建築 [明治大正昭和] 3 国家のデザイン』三省堂、1979年。河上眞理・清水重敏『辰野金吾：美術は建築に応用されざるべからず』ミネルヴァ書房、2015年)、また本図録でもその呼称が用いられているので、本稿でもそれにならうこととした。つまり、以下、本稿において「障壁」とは、この南側壁面のことを指す。
- *2 この構成に関し、「辰野の築いた一階高の障壁は、防御を固めるとともに、一方、ドームを頂きペディメントを張る記念碑の正面玄関部を隠し切ることなく外界に見せることに成功している」という指摘は、まさに言い得たものであり、それにより、「金保有の中央金庫としての日銀」に不可欠な「防衛性」と、「国家的記念碑」に求められる「外向性」の両立が実現されている(藤森、前掲書、136-137頁)。
- *3 ルスティカは、狭義には石の表面を粗く仕上げた粗石仕上げだが、広義には滑面の切石積み仕上げを含むと考えられる。したがって、粗石ではなく滑面で仕上げられた日銀本店の第1層は、広義のルスティカに当てはまり、本稿でもその意味で用いている。
- *4 なお、このベルギー国立銀行と日銀本店のファサードを比較すると、他に

も以下のような共通点がみられる。まず、双柱に支えられたペディメントを立面に備えていること。また、そのペディメントの下に、さらに入れ子状に、ペディメントを持つ窓があることである。ただし、ベルギー国立銀行では、三角ペディメントの下では窓のペディメントの形を筒形にし、さらに柱もカリアティッドとして対比を見せていたのに対し、日銀本店では、窓のペディメントも同じ三角ではあるが、より簡素なドリス式の角柱を用い、さらに左右に1スパンずつ拡張した形式とすることで変化をつけている。

- *5 ここで、標準的なコリント柱頭の形を確認しつつ、日銀本店の特徴にも触れたい。まず、柱頭の中心には、鐘を上下逆さにしたような形の芯があると考えるとわかりやすい。実際にはその芯はほとんど見えないが、それを覆うように植物の葉が張り付いている。葉は全部で3段あり、隣接する上下の段では、左右に半幅ずつずれながら重なっている。また、下から数えて1段目の葉の上部からは垂直に茎が伸び、2段目の葉が外側にカーブし始めるあたりの高さで、左右二つに枝分かれしながらカーブを描くが、日銀本店のものはその茎が太く立体的で、また、3段目の葉も1、2段目のものと同程度の厚みを持っている。なお、葉の先端があまり薄くならず厚みを持つ点は、中世的な意匠を連想させられるが、『滞欧野帳』をみると、本図録14頁の下段左図の他にも、葉の先端に厚みを持つ中世の柱頭のスケッチが数点残されている。一般的なコリントに話を戻すと、その茎の先端にはそれぞれ大小の渦巻きが形成されるが、日銀本店のものは、それが大振りて縁の装飾がないため幾何学的な印象が強い造形となっている。この大きい方の渦巻きは、90度の角度を成す側面から伸びる渦巻きと角で一体となり、合計で4つになる。そして、それら4つの渦巻きによって鎌のようなカーブを持つアバクスの四隅が支持される。また、大小の渦巻きの隙間には、「芯」の表面が見えている。
- *6 コリント柱頭の植物については、ウィトルウィウスの建築書にもアカンサスという記載があるが、必ずしも常にアカンサスそのものがかたどられたわけではなく、たとえば、葉を五裂の形としつつ、一つ一つの裂片にオリーブの葉を当てはめる例は古代から多く見られた。このことから、コリント柱頭の植物装飾は、単に庭に生えている植物が描かれたのではなく、そこには理想化された植物の姿が投影されてきたと考えられる。
- *7 この他にも、葉を平らに作られた例はいくつもあり、たとえば、Pier Nicola Pagliara: *Antonio da Sangallo il Giovane e gli ordini (L'Emploi des Ordres a la Renaissance)*, ed. A. Chastel, J. Guillaume, Picard, 1992, pp.137-156) では、アントニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネを中心に、古代ローマ以来の数点の作例が紹介されている。また、コロッセオとパラッツォ・ルチェライは、後者が前者を範としたという関係にあるが、ルチェライの方は中世の柱頭のウォーター・リーフのようでもある。
- *8 たとえば、セルリオ、パラディオ、ヴィニョーラなど (S. Serlio: *L'Architettura I libri I-VII e Extraordinario nelle prime edizioni*, repr., Il Polifilo, 2001. A. Palladio: *I quattro libri dell'architettura*, 1570, repr., Hoepli, 1976. G. B. Vignola: *La regola delli cinque ordini d'architettura*, 1562 (邦訳『ヴィニョーラ 建築の五つのオーダー』長尾重武訳、中央公論美術出版、1984年))。
- *9 ただ、残念ながら、同地での『滞欧野帳』は今のところ確認されていないらしい。辰野のヨーロッパ旅行については「鼎談 辰野金吾のグランドツアー 清水重敦×河上眞理×藤森照信」(『イタリア建築探訪!』工学院大学建築学部同窓会 NICHE 出版会、丸善出版、2018, pp.8-19) および、河上・清水、前掲書、清水重敦、河上眞理『辰野金吾 1854-1919』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2014年を参照した。
- *10 註8で挙げた、セルリオ、パラディオ、ヴィニョーラのいずれでも、柱頭の詳細図では葉が細部まで描きこまれている。
- *11 日銀本店の葉は完全には平らではなく、中央脈が立体的にかたどられ、水平の葉脈が彫られている。これに似た例としては、たとえば、ロジャール・ルチェライ、パラッツォ・バルバラノの中庭、サンタ・マリア・デッラ・パーチェの中庭などにも、浅い葉脈を彫られた例がみられるが、どれも水平ではなく斜め上方を向いている。そして、これらのいずれより、日銀本店のものは「立体的」であることから、その表現の目的は必ずしも「平ら」にすることではなかったのではないかと考えさせられる。なお、平らな葉は日銀本店内部の客溜吹き抜け上部や、旧京都支店の吹き抜け内部にもあるが、こちらは表面もまったく平らに作られている。
- *12 日銀の施工における石の加工には困難がとまない、「辰野が原寸で引くギリシャ式のフリーハンド曲線を、正確に立体に移すことは至難であった」という(藤森、前掲書、135頁)。また、木下和也、内田青蔵「日本近代における古典主義様式の銀行建築の意匠に関する一考察」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』2014年9月, pp.609-610)によれば、日本近代の銀

行建築においてコリント式オーダーが用いられるのは、明治28年が最初で、明治29年が2つ目である(つまり、日銀本店は2つ目のコリントということになる)。

- *13 コリント柱頭の葉と渦巻きの比率は、ルネサンスのものでは、(下から数えて)「1段目の葉」:「2段目の葉」:「3段目の葉と渦巻き」が、1:1:1になっているものが多い(つまり、「1段目と2段目の葉」:「3段目の葉と渦巻き」は2:1)。それに対して、日銀本店では渦巻きが大きいので、「1段目と2段目の葉」:「3段目の葉と渦巻き」がほぼ1:1に近い比率となっている。ただし、これは実測値ではなく、ほぼ正面から撮影した写真から測ったもの。ちなみに、内部の2階「八角室」(中央ドーム下の部分)には葉を丁寧に彫り込んだコリントの柱があるが、その柱頭での比率もほぼ同様である。なお、ルネサンス以降の様々な建築書等におけるコリント柱頭のプロポーシオンについては、土居義岳「コリント式柱頭に関する議論: フランス王立建築アカデミー(1671-1793)に関する研究 その3」(『日本建築学会計画系論文集』第471号、1995年5月, pp.193-201)に詳しいが、その中で紹介されている24点のコリント柱頭と比べても、日銀本店のものは渦巻きが大きい。
- *14 たとえば、Gabriele Morolli: *L'“Elocutio” dei Capitelli (L'Architettura di Lorenzo il magnifico)*, ed. G. Morolli, C. A. Luchinat, L. Marchetti, Silvana, 1992, pp.272-277) では、フィレンツェにおけるルネサンスの柱頭の様々な作例について、比較しながら論じられ、Gabriele Morolli: *La lingua delle colonne*, EDIFIR, 2013)にも、ルネサンスの様々な柱頭の作例についての詳解がある。
- *15 たとえば、この柱頭をベルギー国立銀行の立面に当てはめたら、明暗の強い周囲の装飾とは釣り合わないだろう。このことから、このコリントのデザインが、日銀本店の立面とはよく調和していることがわかるのではないかと。
- *16 トリグリフとは、ドリス式オーダーのエンタブレチュアにある矩形の装飾。縦に2本の溝が彫られ、左右の両側面も面取りされているが、これは木材端部の水切りと考えると理にかなった形である。
- *17 たとえば、『第四書』の、ルスティカ式のトスカナ式扉口 (S. Serlio, *L'Architettura. I libri I-VII e Extraordinario nelle prime edizioni*, ed. F. P. Fiore, 2 vols., Il Polifilo, 2001, Lib. IV, Venezia, 1537, c. 12r.) など。
- *18 グッタエとは、ラテン語で「滴、玉粒」を意味するが、一般的には、小さな三角形(もしくは三角錐)が6つ横に並ぶ形で作られる。これは、トリグリフ(=梁端部)を下から刺さして固定する、木栓のような部材をかたどっていると考えられる。
- *19 つまり、ここではグッタエ上部のレグラとあわせて、計2段の帯となっている。また、グッタエの位置に相当する帯は、わずかに下に広がる台形となっている(図2参照)。同じ表現は、日銀本店の内部にもみられる。なお、長野宇平治による新館では6つの三角形が作り出されている。
- *20 V. Scamozzi, *L'idea dell'architettura universale*, Venezia, 1615, repr. The Gregg Press, 1964, Vol.2, p.6, p.58 など
- *21 イオニア式オーダーのフリーズをふくらんだ形とする例はしばしばみられるが、飛ヶ谷潤一郎「ふくらんだフリーズについて」(『盛期ルネサンスの古代建築の解釈』中央公論美術出版、2007年、241-282頁)によると、それはラファエッロに始まり、ベルツィ、セルリオ、パラディオへと伝えられたという。この形はパラディオの『建築四書』にも描かれているので、2階の窓のデザインにおいて辰野がこのことを参考にした可能性はあるのではないかと(つまり、1階がドリス、2階の窓にイオニア(のフリーズ)、一番高い位置の大オーダーがコリントという立面構成になる)。

図版出典

図1、2: 筆者撮影

図3: Gherardo Spini, *I tre primi libri sopra l'istituzioni de' Greci et Latini architettori intorno agl'ornamenti che convegono a tutte le fabbriche che l'architettura compone (Il disegno interrotto: trattati medicei d'architettura)*, ed. F. Borsi, C. Acidini, D. Lamberini, G. Morolli, L. Zangheri, Gonnelli, 1980, n. 2, p.24)

図4: 『滞欧野帳』第3巻

図5: V. Scamozzi, *L'idea dell'architettura universale*, Venezia, 1615, repr. The Gregg Press, 1964, Vol.2, p.58

(横浜国立大学大学院・都市イノベーション研究院特別研究教員)

明治期に入り、政府の官営事業を統括し、わが国の産業近代化を主導する目的で工部省が設立された。そして、工部省所管のもとに工学に関する学生を養成する工学寮が創設された。現在の東京大学工学部に繋がる教育機関である。

欧米の技術を導入して官営事業を進める工部省は、その指導者として500人を超える外国人を高給で雇用した。いわゆる「お雇い外国人」である。工部省の事業を出費のかさむ「お雇い外国人」から日本人への切り替えを求める政府は、工学寮の卒業生を待ち望んだ。

工学寮は、のちに工部大学校と改称され、1879年に造家学科の1期生の4人が卒業する。各科を首席で卒業した11名が、いわゆる「お雇い外国人」に代わる後進の指導者を期待され、官費留学生として欧州に留学する。造家学科の辰野金吾もその一人であった。1880年3月にイギリスに到着した辰野はそこで2年間を過ごした後、さらに1年をかけてフランスとイタリアを巡り、1883年の5月に帰国する。イギリスでは、ロンドン大学で建築学を修学する一方、ウィリアム・バージェスの事務所等で実務経験を積み、フランスとイタリアでは、歴史的建造物から最新建築まで様々な建築を訪れた。ウィリアム・バージェスは、工部大学校の教授であるジョサイア・コンドルの師でもあった。辰野はこの留学で、建築教育方法のほか建築家としての心構えも吸収することとなる。

帰国後、コンドルに代わり工部大学校の教授となり、工部省廃止後の1888年、内務省の臨時建築局の工事部長となる。国家から臨時建築局の辰野に与えられた使命は、西洋で培われてきた建築を日本に植え付け、定着させることによって、日本の近代化を図ることであった。

そうした中、政府は日本銀行から新本店の設計者の推薦の依頼を受ける。政府は、満を持して辰野を選んだ。明治維新後20年にして、「お雇い外国人」による西洋館と江戸期から続く棟梁による擬洋風建築に代って、ようやく工部大学校で教育を受けた日本人建築家による国家的建築が建てられることになる。

辰野は、直ちに欧米各国の銀行建築の調査に向かった。イングランド銀行とベルギー国立銀行等の詳細な調査、イタリア・イスキア島での地震調査、さらにパリ万国博覧会で見るエッフェル塔など、日本銀行新本店（以下、「日銀本店」とする）の設計の糧となる2度目の海外渡航であった。

帰国後1890年の年明けから設計を開始し、半年後の6月に川田日銀総裁に精密な模型*1と設計図を提出する。総3階建て縦横約62m四方にのぼるわが国における初の本格的洋風石造建築であった。

日銀本店の建築的価値は、「日本人建築家による初めての国家的建築」であることのほか、①新しい建築体制を築いたこと、②石造による初めての様式建築であること、さらに③先駆的な建築設備の導入により国内建築界を育成したことがあげられる*2。

34歳となる壮年建築家の辰野に、日銀本店の建設はその手腕を見せる材料となった。

■ 新しい建築体制

日銀本店の建設以前、少し大きな工事になると、日本建築に通じ、洋風建築も手掛ける熟練技術者を現場施工の責任者とするのが普通で、学校を出たばかりの建築家には施工を任せられないと考えられていた。しかし辰野は日銀本店の工事でこのような従来からの慣習を打ち破る。辰野は建築現場を管理する日本銀行建築所に自らの教え子を送り込み、自らの工事監督の下で厳しく建築実務を教え、後継となる建築家を育てていく。

欧米視察に同行した同郷の岡田時太郎、工部大学校卒業前から設計を補佐する葛西萬治を始め、辰野が創設・運営に絡む工手学

校（現・工学院大学）*3と東京職工学校（現・東京工業大学）からも多くの新卒技術者を建築所に迎えた。辰野と共に日本銀行の建物を築いていく日本銀行技師の誕生でもあった。

また、工事の発注は建築所が工事の種類や工区毎に契約する請負会社を管理する分割請負方式とし、前年の1889年に公布された会計法に倣い、国内ではまだ前例の少ない一般競争入札制度を取り入れる。

辰野の率いる建築所による厳格な請負契約と品質管理は、建築請負業の質的向上を強い、今日の近代的な建築会社に脱皮していく基礎固めとなった。

■ 石造による初めての様式建築

明治期のはじめ、正当な建築教育を受けていない「お雇い外国人」による西洋館と、それを模倣する擬洋風建築は、西洋で培われてきた様式建築と異なる日本独自の様式であった。

煉瓦や石という西洋建築に不可欠な建築材料が未発達であったこともその大きな要因でもあった。正当な建築教育を受けた「お雇い外国人」が作る古典様式の建物でも、列柱、軒蛇腹等の装飾部にのみ石を用い、他は煉瓦であった。辰野自身の初期の作品となる、工科大学（1888年築）も同様であった。西洋で培われてきた建築を日本に定着させたいと考える辰野は、西洋建築に不可欠な石を用いる石造建築を求めていた。

そうした中、国家的建築であり、中央銀行でもある日銀本店の建築にあたり、その建物に威厳と重厚感を求めた辰野は、煉瓦のゴシック系様式を退け、石の古典様式を選ぶ。

また、古典様式はギリシャの白大理石の神殿を源とし、理知、秩序、永遠といった性格を期待されることが多く、目の細かい白い石が好まれる。辰野は、日銀本店の建築において瀬戸内海の北木島から採掘する白い花崗岩（図1）を選んだ。

明治初期より、東京をはじめとする関東では、江戸城の石垣や墓石としてなじみの深い安山岩を建築石材として用い、硬い花崗岩は砲台や橋梁の一部に限られ、異例の選択であった。辰野は、日銀本店の建築に先行して、第一銀行大阪支店（1891年築）で初めて外壁に石を用いている。その経験を生かした自信の選択であった。

辰野は、北木島の石を加工するために硬い花崗岩の加工経験のある大阪の石工たちを東京に呼び寄せた。それでも、辰野が描く古典様式の削形曲線（図2）を正確に石に刻むことは困難であり、妥協を許さぬ現場監督を石工たちが襲撃する事件もあった*4。

日銀本店の外壁で使用する石は北木石だけではない。2・3階の外壁には、神奈川県湯河原から採掘する白丁場石を用いている。白丁場石は安山岩ながら北木石に近い白色で、並べて使用しても違和感がない。外壁頂部のバラストレードと軒蛇腹に銅板を用いているのは、濃尾地震の経験により軒廻りの軽量化を図った変更と言われている*5。北木石と白丁場石の組み合わせが当初からなのか、同じく設計変更によるものか定かではない。

いずれにしても、壁面が白く輝く日銀本店の落成は鮮烈であった。日銀本店で示した石造による様式建築は、「お雇い外国人」の作る赤褐色の煉瓦造を終わらせ、これ以降、白色の石造が日本の様式建築のスタンダードとなった*6。

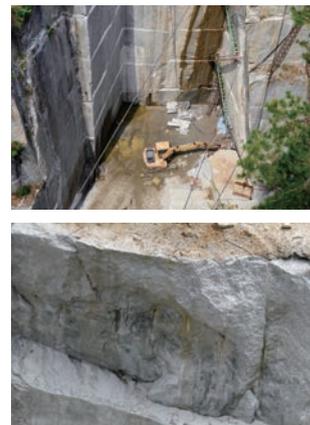


図1 現在の北木島（岡山県）の採石場

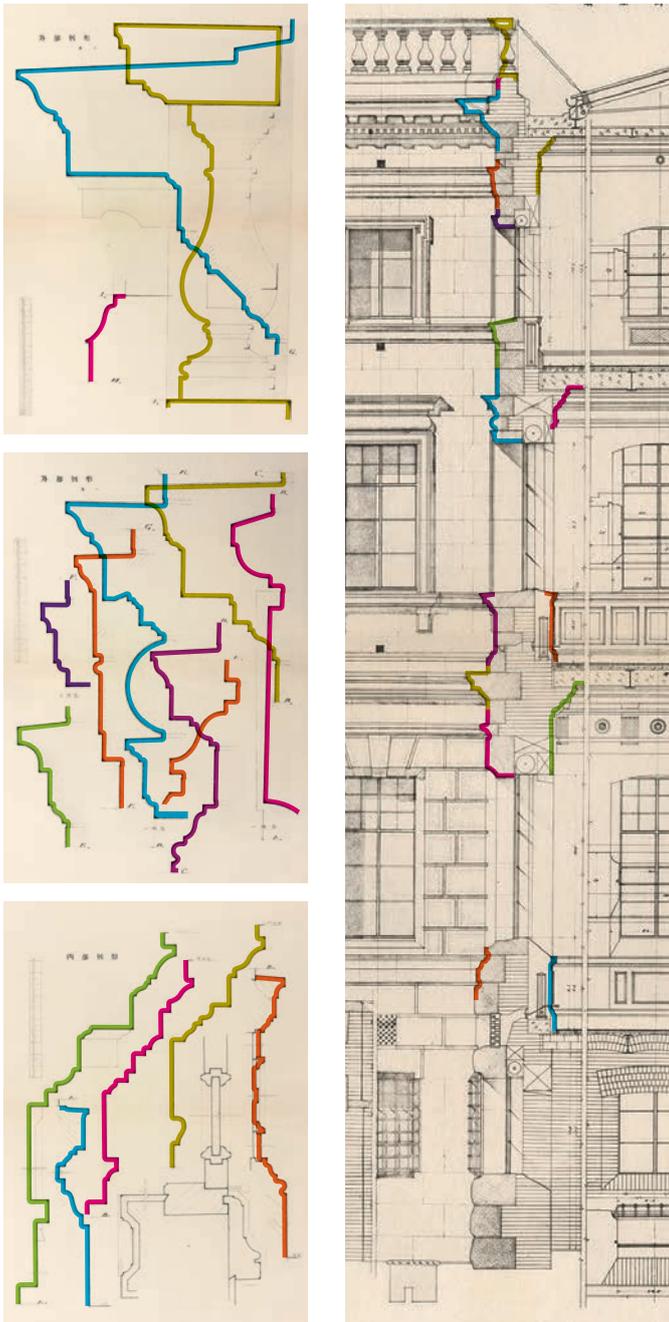


図2 矩計図と剖形一覧の照合
『辰野記念 日本銀行建築譜』一般矩計詳細図、剖形図より (p.28,29 参照)

■ 先駆的な建築設備の導入

西洋建築技術を日本に植え付け、定着させることを使命とする辰野は、日銀本店の建築に多くの先駆的な建築設備を取り入れている。先ず、地下階から3階までの電動式乗用エレベータと1階から地下金庫へ現物を搬送する水圧式の貨物エレベータをアメリカのオーチス社から輸入し設置した。日本における乗用エレベータは上野浅草の陵雲閣(1890年築)が最初とされるが、同エレベータは、安全性の問題から約半年後に使用停止となりほとんど一般利用がされていないため、日銀本店に設置したエレベータが実質的な第1号機ともいえる。

また、全ての外壁窓に鉄製シャッターを設置した。英国のクラーク・バーネット社から輸入し、「豊込防火鉄戸」と称して日本で最初に設置されたシャッターである。

そのほか、電灯設備、蒸気暖房設備、機械換気設備、水洗衛生設備と、今日では一般的となる建築設備も取り入れている。電力供給、下水設備などのインフラ設備が整う前の先駆的な建築設備であった。

建設機械でも、建設用地に近接する日本橋川から重量資材を荷

揚げする為の5トン昇降クレーン、さらに荷揚げした資材を建設用地まで搬送する専用の軽便鉄道(フランス・ドコービル社)を敷設した。同じ軽便鉄道を現金の搬送用に地下金庫の回廊にも取り入れている。

また、先駆的な設備の導入にあたり金庫鉄扉、電気設備、暖房設備等に真野文二^{*7}、衛生・機械設備に中島鋭治^{*8}など当時新進気鋭の専門工学者の協力を得て、日本の建築・機械工学の発展に寄与した。

日銀本店は石と煉瓦以外はすべて輸入した資材と機械で建てられていると言われる。その中で、辰野は先進的な技術の導入を単に西洋技術の輸入に留まらずことなく、日本の建設技術者に対して西洋建築技術を取得する機会を与えた。

銀行建築の基幹となる金庫鉄扉もその一つである。金庫鉄扉の工事業者選定にあたっては国内実績のある山田金庫店を特命して、英国のホプスハート社から輸入する金庫鉄扉の据付け工事に留まらず、同鉄扉を参考にして国産金庫鉄扉の製造も発注している^{*9}。(図3)日本の金庫鉄扉製造技術の育成である。

日本人建築家による初めての国家的建築となる日銀本店は、日本人建築家が「お雇い外国人」に代って国家を建築する力量を蓄えたことの証となった。

そして、辰野は「日本近代建築の父」となった。

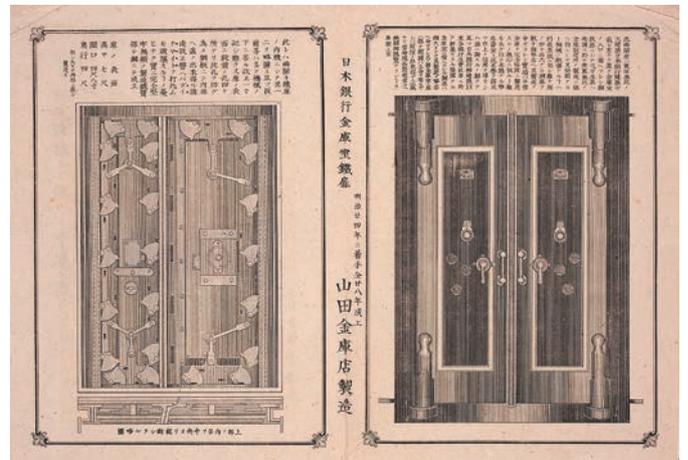


図3 日本銀行金庫室鉄扉(山田金庫店広告) 国文学研究資料館

注

- *1 設計と並行して、総製作費1000円を超える縮尺1/25の精緻な模型を作成した事が「建築事項報告草案 第1回」に報告されている。
- *2 藤森氏は日銀本店の歴史的価値として、①日本人建築家による最初の国家的建築、②新しい建設体制、③石造による最初の本格的様式建築の三つを挙げている。(藤森照信『日本の建築 [明治大正昭和] 3国家のデザイン』三省堂、1979年 P-132)
- *3 日本銀行建築所の技手12名の内、山本鑑之進、下條領一郎等8名の工手学校卒業生が「工手学校一覧 明治27年版」および「建築事項報告草案」第1~12回から確認できる。
- *4 「(1892年)6月3日、深川東大町当建築材料置場ニ於テ花岗岩彫刻検査ノ節、石工事督役小林悉ノ厳格ナル検査ヲ慣リ暴行ヲ加ヘ負傷」として「建築事項報告草案 第4回」に報告されている。
- *5 藤森照信『日本の建築 [明治大正昭和] 3国家のデザイン』三省堂、1979年 P-135
- *6 日銀本店の建築を転機に、北木石は日本銀行大阪支店、横浜正金銀行本店、明治生命保険など金融系建物を中心に45以上の建物に使用されている。「日本石材史」(日本石材振興会 1956年)
- *7 日銀本店の建築において、当時工科大学機械工学教授の真野文二(1861-1946)が「当建築用材金庫鉄扉等外国注文之際シ製図及書簡調整」、「当建築用通風機械等外国注文ノ為メ書簡及製図」、「当所電灯設置計画及製図物揚器(揚重機)試験等」、「蒸気罐据付及試験等」および「暖房試験等」に関わったことが「建築事項報告草案」の第3回、第5回、第7回に報告されている。
- *8 日銀本店の建築において、中島鋭治(1858-1925)がアメリカから輸入した水洗「便器検査」に関わったことが「建築事項報告草案 第7回」に報告されている。中島は工事完成後、工科大学土木工学教授に転じ、「日本の近代衛生工学の父」と呼ばれる。
- *9 山田金庫店を指名し、英国製金庫鉄扉の見本を示して試作したことが「建築事項報告草案 第2回」に報告されている。

(前日本銀行技師)

日本銀行本店本館（以下「本店本館」という）建設時の建築関連資料は、日本銀行にはほとんど残されていない。辰野金吾を顕彰し、日本銀行での実績を纏めた記録集の作成が計画されており、1カ所に集められていた折りに、1923年の関東大震災でそれらが全て焼失したことの影響が大きい。辰野金吾による本館は、日本人による最初の国家的近代建築でありながら、その史資料の制約などから、藤森照信氏による研究^{*1}、小樽支店を中心とした駒木定正氏による一連の研究^{*2}を除いてほとんど行われてこなかった。

ここでは現時点で確認することのできる辰野金吾による日本銀行建築の主要関連資料について整理しておきたい。

■ 日本銀行に残る記録

まず本館については、建築中の写真記録全17点が残されている（「新築場沿革図」^{*3}、撮影：江崎礼二）。高い足場から撮影され、中央で接合されたパノラマ写真で、細部から工程に関わる多くの情報を得ることができる。竣工後の本館写真は、装飾性のある西側（外堀、西玄関側）や南面（正面玄関側）の角度が殆どであるが、断片的で建設途中ながら東側や北側の記録も含む。

また本館建築中に建築所主管の安田善次郎から総裁に報告される形式でつくられた半期毎の「建築事項報告草案」が、着工から落成まで12回分残されている^{*4}。内容は、進捗報告や個別の請負契約、各種届け出や半期決算などで貴重な史料である。

その他、明治期の本店・支店の店舗について概要や竣工年等が記され、本店は、北側の西分館や機械室を含めた地下1階～3階までの簡易図面も掲載されている基礎資料がある^{*5}。また関東大震災後の復旧工事に関する各種資料（「本館補修工事議」など）からも竣工時の本館を伺い知ることができる^{*6}。

支店関係史料も、その多くは関東大震災で焼失したと考えられ、辰野との直接的な関わりを示す史料はあまり残されていないが、西部支店の建設中の図面が残されており、細部に辰野の指示書きが見られ、辰野直筆の日本銀行建築関連史料として希少なものである^{*7}。

■ 没後の記念事業による記録

辰野金吾の没後の功績を後生に伝えるための3つの記念事業のうち2つが本館建築に関する情報を伝えるものである。まず辰野葛西事務所による『工学博士 辰野金吾伝』（1926年）には本館建設のための欧米出張随行時の岡田時太郎の回想が掲載されており、同出張についての貴重な手がかりである。

竣工当初の図面として『辰野記念 日本銀行建築譜』（1928年）が図面集として出版されており、一次史料ではないが、関係者が実測と諸資料などをもとに作成したものとして重要である。同書の冒

頭には本店本館建築時の経緯も建築録として纏められている。

■ その他の史資料

辰野家に遺された史料については、藤森照信氏の文献で紹介され、現在は東京大学工学部に所蔵されているが、それ以外にも辰野家に伝わる史料の存在が清水重敦氏・河上真理氏の著書^{*8}で明らかとなっており、今回の展示企画にあたり一部整理を進めた。建築に直接関わる資料は多くはないが、本店本館設計のための欧米視察時の家族への私信や地図などが含まれている。私信の内容は『工学博士 辰野金吾伝』で岡田時太郎が回想している内容とも一致している。



本店本館設計のための欧米視察時のローマより家族への書簡 辰野家蔵

また建築学会図書館には、建築学会に寄贈された辰野の蔵書の一部が、「辰野文庫」として所蔵されている^{*9}。

一方で『高橋是清自傳』（高橋是清口述、上塚司筆録、千倉書房、1936年）に是清の日本銀行建築事務主任時代のエピソードが具体的に述べられ、口述筆記という体裁の読みやすさなどから様々な形で引用されてきた。高橋是清と辰野金吾が唐津で師弟関係であったことの面白さも相俟って、同書のエピソードが事実のように捉えられている場合も見受けられる。しかし、例えば、高橋是清が建築事務主任を務めたタイミングで石積煉瓦造に変更されたかのように書かれているが、着工当初より石積煉瓦造であったことは、今回紹介した他の複数の資料から明らかである。同書における本館建築関係の記述の扱いには、慎重を期す必要がある。

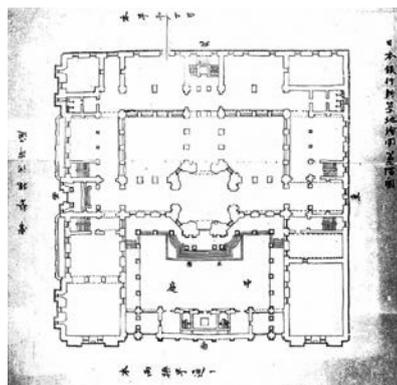
■ 今後に向けて

今後も辰野金吾と日本銀行建築に関わる纏まった資料の発見は期待しづらいであろう。しかし、英国留学後に、日本人建築家による初の国家的近代建築、そして唯一の中央銀行の本店を建てるにあたり、改めて欧米を視察し、様々な最先端の技術、伝統的そして流行のスタイルの建築を見た辰野が、何を考え設計をしたのか、現存資料、そして現存する建築を丹念に精査していくことにより、更なる研究の余地はあるのではないかと考えられる。没後100年の特別展、本店本館の修復工事を機に改めてその特有な機能面と共に、辰野の手がけた支店を含めて再考していきたい。

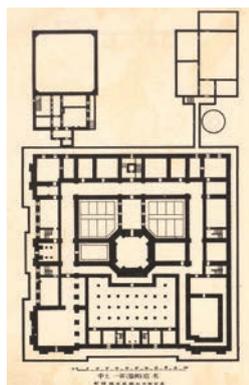
注

- *1 藤森照信『日本の建築 [明治大正昭和] 3 国家のデザイン』三省堂、1979年など
- *2 駒木定正「明治期日本銀行の建築設計組織と小樽支店 (明治45年) の設計者」日本建築学会計画系論文集 (570)、2003年など (巻末文献リスト参照)。
- *3 日本銀行アーカイブ 8925 (デジタルアーカイブおよび貨幣博物館ホームページで公開済)。
- *4 日本銀行アーカイブ 22829。ただしマイクロフィルムのみで、現物は確認できない。
- *5 1913年、国立国会図書館デジタルコレクション (書誌 ID 000001172141)。
- *6 日本銀行アーカイブ 1135 など。
- *7 日本銀行アーカイブ 8499。
- *8 清水重敦・河上真理『辰野金吾：美術は建築に応用されざるべからず』ミネルヴァ書房、2015年など
- *9 「辰野文庫・妻木文庫を記念図書室に開設」建築雑誌 (1216) 1984年、藤森照信「日本建築学会図書館所蔵「辰野・妻木文庫」資料展 展示資料解題」。

(当館学芸員)



「建築事項第1回報告草案」より1891年地鎮祭が行われた1890年9月1日の記事の後に掲げられており、現存が確認される最も初期の図面。



本店 (新築) 図面より土中 (地下) *5 国立国会図書館蔵

主要参考文献

図書

- 辰野金吾・葛西萬司『家屋建築實例 1 卷』須原屋、1908 年
白鳥省吾 編『工学博士 辰野金吾伝』辰野葛西事務所、1926 年
辰野紀念事業第二部 編『辰野紀念 日本銀行建築譜』墨彩堂、1928 年
- 村松貞次郎『日本近代建築史ノート：西洋館を建てた人々』世界書院、1965 年
村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会 1965 年
藤森照信『日本の建築 [明治大正昭和] 3 国家のデザイン』三省堂、1979 年
河東義之編『ジョサイア・コンドル建築図面集 I』中央公論美術出版、1980 年
鈴木博之『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』中央公論美術出版、1996 年
清水重敦・河上眞理『佐賀偉人伝 8 辰野金吾：1854-1919』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2014 年
清水重敦・河上眞理『辰野金吾：美術は建築に応用されざるべからず』ミネルヴァ書房、2015 年

展覧会図録・報告書

- 福島市文化財調査報告書第 21 集『日本銀行福島支店旧行屋（解体）調査報告書：明治洋風建築物』福島市教育委員会、1980 年
京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財 旧日本銀行京都支店修理工事報告書』京都府教育委員会、1988 年
東京ステーションギャラリー『東京駅と辰野金吾：駅舎の成り立ちと東京駅のできるまで』東日本旅客鉄道（株）、1990 年
東京ステーションギャラリー『鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展』（増補改訂版）建築画報社、2009 年
重要文化財旧諸戸清六邸（現六華苑）創建 100 年記念特別展『コンドルのディテール：「日本近代建築の父」
ジョサイア・コンドルの芸術性にせまる』桑名市博物館、2012 年

論文

- 中村達太郎「日本銀行金庫扉」建築雑誌 (42)、1890 年
辰野金吾「伊太利亞國イスキヤ島地震建築」建築雑誌 (43) (47)、1890 年
「日本銀行ノ新築工事」建築雑誌 (65)、1892 年
「雑報」（日本銀行新築落成関係記事）、建築雑誌 (112)、1896 年
辰野金吾「家屋裝飾論（ハウスデコレーション）」建築雑誌 (4)、1887 年
辰野金吾「日本銀行西部支店新築仕様書」建築雑誌 (124)、1897 年
辰野金吾「日本銀行大阪支店建築所請負人心得書」建築雑誌 (135)、1898 年
（日本銀行 付図）建築雑誌 (135)、1898 年
（日本銀行付属建物 付図）建築雑誌 (145)、1899 年
（日本銀行付属建物及び営業室 付図）建築雑誌 (147)、1899 年
辰野金吾「東京に於ける洋風建築の變遷」建築雑誌 (229)、1906 年
辰野金吾・葛西萬司「相撲常設館」建築雑誌 (271)、1909 年
辰野金吾「建築學會大會講演：開會の辭、附所感」建築雑誌 (331)、1914 年
「建築學會に對する辰野博士の功績」ほか還曆記念文献、建築雑誌 (348)、1915 年
曾禰達藏「故名譽會長工學博士辰野金吾君を弔ふ」建築雑誌 (388)、1919 年
山川健次郎・高橋是清・寺野精一・中村達太郎・平沼淑郎・池上四郎・塚本靖・古市公威・片岡安・長野宇平治・
横河民輔「名譽會長工學博士辰野金吾君薨去」建築雑誌 (388)、1919 年
- 遠藤明久「開拓使物産売捌所の研究」第 1 報～第 20 報、日本建築学会論文報告集、1963～1972 年
駒木定正「日本銀行小樽支店（明治 45 年）の主要構造と仕様」日本建築学会計画系論文集 (471)、1995 年
青井 哲人「辰野金吾の街（『建築雑誌』アーカイブス【第 7 回】）」建築雑誌 (1491)、2002 年
乾昭夫「明治漢詩壇と漢詩メディア」『成島柳北研究』ペリかん社、2003 年
駒木定正「明治期日本銀行の建築設計組織と小樽支店（明治 45 年）の設計者 -- 辰野金吾、長野宇平治、岡田信一郎の関わり」
日本建築学会計画系論文集 (570)、2003 年
駒木定正「日本銀行小樽支店の明治 42 年における建築請負契約について」日本建築学会計画系論文集 (632)、2008 年
中村茂樹「日本銀行本店本館と銀行建築」『彩色立面図に見る日本の近代建築 一銀行・オフィスビルから邸宅まで』
神奈川県立歴史博物館、2010 年
河上眞理「辰野金吾のグランド・ツアー：『辰野金吾滞欧野帳』解題」日本建築学会学術講演梗概集、2010 年
清水重敦・河上眞理「辰野金吾の見たフランス：『辰野金吾滞欧野帳』解題その 2」日本建築学会学術講演梗概集、2011 年
清水重敦・河上眞理「辰野金吾の見たイギリス：『辰野金吾滞欧野帳』解題その 3」日本建築学会学術講演梗概集、2012 年
伏見拓朗「辰野金吾が設計した国技館建築について（歴史・意匠）」東海支部研究報告集 (43)、2005 年
渡邊研司「辰野金吾のイギリス留学時代における AA 入会について（建築歴史・意匠）」日本建築学会関東支部研究報告集 (84)、2014 年

協力者一覧

本展の開催ならびに本図録の編集にあたり、貴重な資料・作品のご出品を賜りましたご所蔵者・関係諸機関の皆様、またご助言・ご協力を頂きました関係者に厚く御礼申し上げます。(五十音順、敬称略)

大内田史郎

加藤耕一

河上真理

小島浩之

駒木定正

清水重敦

陣内秀信

菅野裕子

武田晴人

武山肇

辰野智子

丹治雄一

角田真弓

外山浩介

外山順子

長崎浩

中村茂樹

半澤紀恵

日暮雄一

久野哲矢

藤森照信

村野正景

森脇優紀

矢野正隆

Ellie Paton

Jennifer Adam

Jules Huysmans

Margherita Orlando

Marianne Danneel

小樽市総合博物館

京都文化博物館

工学院大学大内田研究室

国文学研究資料館

国立公文書館

国立国会図書館

首都大学東京図書館

東京ステーションギャラリー

東京大学経済学部資料室

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻デジタルミュージアム準備室

盛岡市先人記念館

Bank of England Archive

Bank of England Museum

Museum of the National Bank of Belgium, Brussels

National Portrait Gallery, London



『辰野金吾滞欧野帳』①より 猫のスケッチ

日本銀行金融研究所貨幣博物館

辰野金吾没後 100 年特別展「辰野金吾と日本銀行 ―日本近代建築のパイオニア―」

Tatsuno Kingo and Bank of Japan: The Pioneer of Modern Architecture in Japan

日本銀行金融研究所貨幣博物館 Currency Museum, Institute for Monetary and Economic Studies, Bank of Japan

103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-1

発行日 2019 年 9 月 21 日

企画・執筆 関口かをり・湯川紅美

編集 関口かをり・湯川紅美・大西舞・松原早希

※本図録を無断にて転載・複製することを禁じます。